

1. 公表期間：令和6年1月5日（金）から令和6年2月5日（月）

2. 計画（案）に対する意見の提出結果：4人（8件）

3. 提出された意見及び市の考え

番号	種別	修正前 該当箇所	ご意見	市の考え方	反映
1	意見	4頁	「2030年ターゲット」は、23のターゲット表を掲載すべきと考えます。全体が見えないと重点項目の強調意図が見えません。ターゲット3, 6, 8, 15は、重点項目としても「全体を俯瞰できる様に23全体の掲載された表を示し、必要なら（重点項目）として、上記の4ターゲットを強調してもよいと考えます。	第7章 資料に「2030年ターゲット」に関する23のターゲット表を掲載します。 (修正本編P73～P74に反映)	○
2	提案	10頁 下から9行目以下	「土地利用計画では、学研木津北地区について、環境調和型・・・（中略）先駆的な自治体経営も目指すこととしています。」の部分が、饒舌で分かりにくくなっているのでは無いでしょうか？  (修正案) 土地利用計画では、学研木津北地区を、「環境調和型研究開発施設（現、環境の森センター・きづがわ）との相互連携」、「地域特性（里山・歴史的資源、地域産業・農業等）の活用」、「生物多様性の保全・活用等の実践」、「成熟社会における新たなまちづくりを先導する」為の「関西文化学術研究都市の一角に位置づけられる持続可能都市・学研木津川モデルの先導的なフィールド」に設定し具体的な活動の推進や多様な主体の参画と活動実施に対する機運を高め、全市的な構想へと発展させていくことを目指します。また、同地区での取り組みにより実証された新たな仕組みの全市的な展開で先駆的な自治体経営のモデルともなるであろう「持続可能都市・学研木津川モデル」の実現を目指します。	平成24年に作成した「木津川市学研木津北・東地区土地利用計画」に記載している学研木津北地区の「まちづくりの展開」として記載の文章を基に記載していますので、誤訳を避ける観点から修正は行いません。	—
3	意見	17頁 4-2 長期目標	4-2長期の目標（令和6年度—令和15年度）  項目が、1～7までありますが、これらはいずれの、これから実施する内容であることから、文法上の言い回しがおかしいと考えます。「が」ではなく「を」でしょう。  項目1, 3, 6, 7について 現在の案 1. 調査の手法が確立し → 調査の手法を確立し 3. 高い運営が確立し → 高い運営を確立し 6. 手法が確立します → 手法を確立します 7. 利用ルールが確立し → 利用ルールを確立し  訂正案 2, 4, 5は現状の文章で良いと考えます。	ご指摘のとおり修正いたします。 (修正前) (修正後) 1. 調査の手法が確立 → 調査の手法を確立 3. 高い運営が確立 → 高い運営を確立 6. 手法が確立します → 手法を確立します 7. 利用ルールが確立 → 利用ルールを確立 (修正本編P17、修正概要版P5)	○
4	提案	回遊路の整備	膨大な資料から、解かりやすく丁寧な説明に感心いたしました。ただ、どれだけの人が目を通すかがやや気がかりです。さて本題ですが、治山に係る提案です。書かれている通り風による倒木や、雨による傾倒木などが多くみられます。これを定期的に伐採して頂けるようですが、その後についてはどうでしょうか。有料が憚られるのであれば、若干の奉仕が伴う方法はでしょうか。具体的には薪の運び出しです。伐採はプロに任ずとして、切り出した木は周辺でのベンチや階段等の材料になりますが、その一部を薪として仕立て提供するのです。ただ運搬が問題になります。そこで、伐採した地点より、駐車場まで貸し出した背負子で丸太を運んでもらうボランティアです。昨今キャンプが流行っており、近隣の笠置は関西の聖地と言われています、需要が有るかも知れません。それに、鹿背山に足を運んで頂く事になり、市民の目を向ける好機になると思います。また、薪割などの余興を付ければ喜ばれるかも知れません。さらには薪運びラリーなどのイベントに発展できるかも知れません。主目的は、回遊路の整備です。そして人を誘う事です。もし、そのような企画が行われるのなら、微力ですが、申請者を薪まで誘導する係をお引き受けします。以上、活動団体に所属していますが私意です。	(1) 「里山をつくる創造的マネジメント」の下から4行目に以下の文言を追加します。(修正本編P53)  「伐採した竹や樹木は、薪等として利用するなど循環型の里山保全を目指します。なお、6次産業化の検討も行います。」  (2) 「古代米を活用した水田整備による生物多様性への貢献」記述に薪の活用案について追記し、節タイトルを変更しました。 (修正本編P70)  (修正前) 「古代米を活用した水田整備による生物多様性への貢献」  (修正後) 「古代米や薪を活用した生物多様性への貢献」	○

番号	種別	修正前 該当箇所	ご意見	市の考え方	反映
5	提案	29頁 治山治水の課題	台風後の見回りは、倒木だけでなくかかり木などの危険な状況の対処をすることになると思います。そういった危険作業の時だけプロを呼ぶのではなく、鹿背山の管理人として数人常駐することはできないでしょうか。普段から手入れをする人がいれば、台風後でも比較的安全に作業することは可能だと思われます。	計画区域内は都市公園として整備しているのではなく、各活動団体が一定の地区を協力し合って保全・活用しているのが現状であり、管理人を常駐させることは考えておりません。	—
6	提案	42頁 団体の世代交代・活動継承	今活動されている方々はだいぶ高齢化しています。そのため、竹林の成長と同等かそれを下回る範囲でしか整備できていません。世代交代するには、現役労働者が頻繁に活動に参加する必要がありますが、普段は仕事をしているため参加できないこともあります。そのため、鹿背山の保全で収入が得られるような仕組みがあれば、鹿背山の保全と世代交代が出来るかと思います。そこで、環境学習の施設を作り、そのスタッフとして環境学習と鹿背山の管理(日常管理や台風後の見回りなど)をしてもらえば良いかと思います。環境学習を行うことで自然に興味を持つ人も増え、将来的に継続して世代交代していける仕組みを作ることが出来るのではないのでしょうか。また、鹿背山の管理者と環境学習の指導者が同一であることで、環境学習に合った鹿背山の管理ができるメリットもあります。	経済的な問題も地区内だけで解決できず、施設を作れば済むことではないと思われますので、計画区域内に環境学習施設を建築する計画はございません。 今後は応援団を機能強化し、これをサポートする事務局機能を持った「交流循環促進チーム」の立ち上げや、新たな里山保全活動の担い手や活動団体の参画促進を行いつつ、当計画で実施予定の自然共生サイトへの登録やその取組みを通して、CSR（企業の社会的責任）だけでなく、里山資源を活かして、企業の本業を通じたCSV（社会的な共有（共通）価値の創造）の推進を目指します。	—
7	意見	43頁 現在行われている小学校や高等学校のかせやまの森での環境教育・総合学習は重要です。	鹿背山と隣接する場所にある城山台小学校の子どもたちが里山体験をしているとのことで、それ自体は歓迎すべきことではあるが、では他の小学校や中学校についてはどうなのかと 思ってしまう。鹿背山での実験を成功させ、それをモデルにして全域で、という趣旨かと思うが、もう少し市全体にも絡めて計画を作れないだろうか。あまりに地域限定にされてしまうと、鹿背山近郊でない木津川市民は関心を持ちにくいと思う。	(1) 記述を次のとおり変更します。(修正本編P43) (修正前) 現在行われている小学校や高等学校のかせやまの森での環境教育・総合学習は重要です。  (修正後) 現在行われている小学校や高等学校のかせやまの森での環境教育・総合学習は重要です。今後、様々な教育機関等と連携し、活動団体を介して環境教育・総合学習に努めます。  文末に追記 これまで環境教育・総合学習を提供した機関は、上記以外にも京都大学、木津高等学校、木津川台小学校、加茂小学校等です。  (2) 記述及び図を追加し、学校関係との連携強化の方針を追加しました。(修正本編P62)	○
8	意見	44頁 環境の森センター・きづがわとの連	環境学習の拠点、保全活動に参加する人の車のための駐車場としての利用とある。環境学習の拠点という部分が一番大切だと思うが、具体性が無さ過ぎる。ごみと里山という観点で取組むことやごみを減らすために何が出来るか、何が出来ないかなどを考える場にしていくべきではないか。	環境の森センター・きづがわとの連携については、同施設内の会議室の利用や、里山保全活動に係る駐車スペースとしての活用を想定しています。ごみ問題については、別部署が精力的に取り組んでおり、新たに本計画で取組むことは想定しておりませんが、里山整備で伐採した竹をごみとして処分するのではなく、竹チップコンポストを配布する等の活動を行い、竹の活用に取り組んでいます。	—